

難いではあるまいか。この書は米国で編集、出版されたために、多少バタ臭い外観を呈している。しかし大井氏によれば、英文の原稿にはすべて氏が目を通して承認を与えたもので、偶然にできた一ヶ所を除いては、氏に無断で外国の学者が手を加えた点はないとのことである。その点、米国側でも実に良心的に訳業が進められた。米国、日本の諸学者の協力の様子は、下記の館協氏の紹介文にくわしい。*Sasa* など未だ分類の確立していない群については、Text 中で断ってあるように、主要な種のみ拾ったこともある。この版のために写真および地図は米国側で新たに用意したものである。著者名索引には生歿の年の記入もあり便利である。通覧して世界の学界への大きい影響が期待できる。誤植が非常に少ないのもうれしい。

なお、大井氏の「日本植物誌」第2版の原稿はこの英文版より後に原稿が出来上ったもので、内容も多少異り、氏の新しい意見が僅かながら加わっていることを附記する。

(津山 尚)

□ 大井次三郎博士の英語版日本植物誌の出版の経過 1965年9月17—19日 Smithsonian 誕生 200 年記念の式典が Smithsonian Institution の主催により、米国ワシントン市の中央広場で盛大に挙行政され、Johnson 大統領の祝辞もあった。その記念行事の一つとして、大井次三郎氏著日本植物誌英語版 “*Flora of Japan (in English)*” の出版祝賀会が行なわれた。因みに、この英語版は大井次三郎氏著日本植物誌(至文堂)の第一版(1953)を基底とし、氏の最近迄の研究を入れてアメリカ側で改訂英訳したものである。

出版記念祝賀会は、9月20日の夜、Smithsonian Institution の迎賓館で行なわれた。アメリカ側より 41 名 (F. G. Meyer, E. H. Walker, T. Koyama [小山鉄夫], H. Matsumoto 各夫妻他) 日本側からは 3 名 (大井次三郎, 松田明子 [日本大使館] 両氏および小生) で、出席者は本著編集ならびに刊行に参与した人達である。会は F. G. Meyer 博士の司会の下に行なわれた。スミソニアン研究所の外事担当の Sindley Galler 博士の祝辞朗読から始まり、Meyer 博士 (米国立樹木園) の本著刊行に至るまでの経過報告があり、出席者全員の紹介と主なロールの報告があり、大井次三郎、小山鉄夫 (ニューヨーク植物園)、L. A. Charette (エール大学)、B. W. Atkinson (National Science Foundation)、Paul H. Oehser (スミソニアン研究所出版局) Egbert H. Walker (スミソニアン研究所の諸氏のテーブルスピーチがあった。私は Meyer 博士の許可を得て、日本植物学者として感謝を懇切に述べ、日米両国の真の協力がこの美しい結果を得たことに対する祝意を表し、Smithsonian Institution と National Science Foundation の将来に対する発展を祈って挨拶の結びとした。

正直のところ、始めどうして Meyer と Walker が editors になっていたかという疑問がこの会において始めて氷解し、アメリカ側の協力が広く深いのに驚嘆した次第であ

る。とにかく日米文化交流の一つの成果として心から拍手を送りたい。

本英語版は 1953 年 Leopold A. Charette 氏がたまたま日本に立ち寄った時、日本植物を採集し、大井博士に同定を依頼すると同時に、ある植物群の種に至るまでの検索表を英訳してもらったことに起因する。Charette 氏が本国に帰り、当時ミズリ植物園の F. G. Meyer 博士と、スミソニアン研究所の研究員で東亜植物に造詣の深い E. H. Walker 博士とに全巻の英訳をすすめた。そこで両氏がこれを諒とし、案を幾度か練り、実行に邁進した。

その後 Meyer, Walker, 大井の三者間で英訳の同意を見て、これが実行に移り、シダ類の部分から英訳が始められたが、双子葉の部で折悪しく大井博士が病気のため静養の止むなきに至り、当時東京大学植物学教室(大学院)に研究中の小山鉄夫氏がこれを担当し、ここにまとまりを見た。ついで小山鉄夫博士はカナダ農務省研究所に留学後、米国ニューヨーク植物園の Associate Curator に就任し、この事業の完成に重要な役割をつとめる一人になった。なお本著翻訳のためにワシントンにある National Science Foundation は Meyer, Walker 両氏に 2 回に亘り財政援助をした。更に出版に際してはスミソニアン研究所の出版局長 P. H. Oehser 氏の申請により National Science Foundation は多額の印刷補助金を交附された。また、本文中次の植物群はそれぞれの専門家によって慎重に取り扱われた。

羊歯植物—C. V. Morton (スミソニアン研究所); イネ科竹亜科—F. A. McClure (スミソニアン研究所); その他のイネ科—Aghes Chase (スミソニアン研究所); カヤツリグサ科の一部・サトイモ科・ホシクサ科及びイグサ科—T. Koyama (ニューヨーク植物園); セリ科—L. Constance (カリフォルニア大学); キョウチクトウ科とガガイモ科—R. E. Woodson, Jr.; アカネ科—F. R. Fosberg (米国地質調査所); キキョウ科—R. McVaugh (ミシガン大学); キク科—S. F. Blake と北村四郎 (京都大学)。

なお、各科各属で米国に専門家がいる限り、その人達が原稿に目を通し、ものに依ってはヨーロッパの分類学者に意見を正したところもある。かかる多数にわたる人達の協力を得て一貫した文章にすることは難事中的難事と言って良い。その難事を成就したのが Meyer, Walker 博士の兩人である。なお附言したい事は巻末の索引を完成したのは日本大使館松田明子氏の特別の助力、また、日本名のローマ字化は米国国会図書館の H. Matsumoto 氏であることも明記しておきたい。

アメリカ側では、Meyer と Walker の両博士が主軸となり、小山博士が全く無報酬で献身的に日米両国の“くさび”の役目をした事を書いておいてもいいだろうし、また私は“陰の翳のかなめ”の役をしたのが Walker 博士ではないかと考えられてならない。

(館脇 操)